

〔研究ノート〕

# 中華人民共和国の政治と法律の指導原理 としての毛沢東思想

飯田忠雄

この研究ノートは、中国法政を受講する学生のために、毛沢東思想の基礎文献を選出して、その内容をノートし、解説を加えたものである。

七 経験の総括から法則を求める

## 一 序 説

- 目 次
- 一 序 説
- 二 実 践 論
- 三 矛 盾 論
- 四 矛盾の処理原則
- 五 三 風 整 頓
- 六 老 三 篇

中国の文化革命（政治・経済・文芸等の革命）が、中国の偉大なる指導者の指導の下に、その思想の実践・実現に立ち上った中国人民の力によって成功しつつあることは、何人も疑い得ない事実であろう。特に、プロレタリア文化大革命は、毛沢東主席が自からおこし指導して推進したものであることは、中国共産党第九回全国代表大会における林彪の報告によって明白である（プロレタリア文化大革命の重要文献集、北京、外

文出版社、一頁。

一九六六年八月八日採択の「中国共産党中央委員会のプロレタリア文化大革命についての決定」は、「プロレタリア文化大革命では、毛沢東の偉大な赤旗を高くかかげ、プロレタリア階級の政治による統率を實行しなければならぬ。広はんな労働者・農民・兵士・広はんな幹部、広はんな知識分子のあいだで、毛主席の著作を活学活用する運動をくりひろげ、毛沢東思想を文化革命の行動の指針としなければならない」と述べている（前掲文獻集一七二頁）。

毛沢東思想は、現代の中国社会の条件下におけるマルクス・レーニン主義である。マルクス・レーニンの主張の真意を、中国社会の実際の条件の下で実践し実現するための指針が毛沢東思想である。したがって、それは、中国革命の実践倫理であるとともに、中国の法原則の根拠を示すものであるとい得よう。

毛沢東の著作は、これを「毛沢東選集」、「毛沢東著作選読」においてみることが出来る。その中から、革命の実践倫理ともみろべき著作を選出類別してみれば、哲學的基礎理論としての実践論、矛盾論、人民内部の矛盾処理原理（人民内部の矛盾を正しく処理する問題について）、消極的実践原理と

しての三風整頓（われわれの学習を改革しよう、党の作風を整えよう、党八股に反対しよう）、および積極的実践原理としての老三篇（人民に奉仕する、愚公山を移す、ベチューンを記念する）となる。これらの著作は、今日の中国における革命原理、生活原理として、くりかえしくりかえし学習され、中国革命を進展させている生きだ思想であるが、同時にそれは、中国革命に参加する者の行動の指針であるという意味で、中国法制における法原理の基礎を形成するものでもある。以下に記述するところは、その内容の紹介と、法原理の解明の試みである。

(1) 中国の文化大革命は、一九六五年一月二〇日に、上海の文匯報が歴史家で劇作家でもある呉賄（ウ・ハン）北京副市長を攻撃する論文を掲載したのに端を発する。一九六九年四月一日の「中国共産党第九回全国代表大会における報告」において林彪が述べているところによれば、プロレタリア文化大革命は、毛沢東主席がみずから起し、指導したものである。一九六六年五月一日の中国共産党中央委員会の「通知」が文化大革命のための理論、路線、方針、政策を確立し、運動全体の綱領となったと、林彪は、右の九全大会における報告の中で述べている。一九六六年八月から九月にかけては、文化大革命にとって決定的な段階を生み出し、北京だけで一度に五〇万人以上の紅衛兵のデモがあったといわれる。紅衛兵は人民解放軍の政治委員によって組織され、訓練されたものであるが、当時そ

の數約二二〇万人と伝えられている。一九六七年には、工場や農村に文化大革命の運動が拡大され、都市と農村に不安情勢が発生したが、いわゆる「三結合」(革命的大衆、革命的幹部、駐屯軍部隊代表者の三者の結合)という臨時權力機構の確立によって、革命の成功を取めた。そして当初、毛沢東派の根拠地は、山東、山西、黒竜江、貴州、青海の五省と北京、上海の二直轄市であったものが、一九六八年一〇月一日當時には、台湾省を除く全国二九の省、市、自治区のすべてにおいて革命委員会が成立した(中華人民共和国成立十九周年祝賀大会における林彪同志の演説、プロレタリア文化大革命の重要文献集、北京、外文出版社、三五四頁)。

## 二 実 踐 論

実践論は、一九三七年七月に発表されたものであるが、それは、マルクス主義の認識論の観点から、中国共産党内の教条主義と経験主義<sup>(1)</sup>という主観主義の誤りを暴露し、認識と実践との関係を明らかにするために書かれたものである。その論述の重点が、実践を軽視する教条主義という主観主義の排斥にあったので実践論と名付けられた。<sup>(4)</sup>

実践論の構成をみるに、まず最初に、マルクス主義の哲学すなわち弁証法的唯物論に基いて、認識と実践との関係の基本的な考え方が述べられている。次に、認識の発展過程について論証がなされる。ここにおいては、人間の認識は、どの

ようにして実践から生じ、それがさらに実践に役立つに至るかについて、理論的論述に加えて、プロレタリア階級の認識の発展、中国人民の認識の発展、戦争に関する指導者の認識などの発展の例が述べられ、さらに、合理論や経験論の誤りを指摘して、教条主義と経験主義とを批判している。第三に、理性的認識の実践への発展過程を論述し、マルクス主義が理論を重視するのは、それが行動の指導性を有するからであるとする。ここにおいては、世界の事物、過程は、たえず推移するのだから、人々の認識運動が完成することはあり得ないとし、右翼日和見主義および左翼空論主義(冒險主義)に反対する。第四に、認識運動の完成について論述する。第五に、無産階級と革命人民の世界改造の闘争の任務の実現について述べている。最後の部分で、全体の総括をし、この論文を終わっている。以下、右の論述の順序に従って、その内容を解説する。

(一) 認識と実践との関係についての弁証法的唯物論の基本的な考え<sup>(5)</sup>

エンゲルスは、「ルードヴィヒ・フォイエルバッハ論」の第二章の終りの部分で、一八世紀のフランス唯物論者の三つの基本的な狭隘性(Beschränktheit)を項目別に挙げている。

その第一は、古い唯物論者の見解が、「化学的または有機物的な性質の事象に力学の尺度だけをもつばら適用した」という意味で、機械論的であったということである。その第二は、「その哲学が反弁証法的である」という意味で、形而上学的であることである。さらにその第三は、社会科学の分野では觀念論が保持されていて、史的唯物論が理解されていないことである。<sup>(6)</sup>

「マルクス以前の唯物論<sup>(7)</sup>は、人間の社会性から離れ、人間の歴史的發展から離れて、認識の問題を考察したので、認識が社会的実践に対して依存する関係、すなわち認識が生産と階級闘争とに依存するという関係を理解できなかった。」<sup>(8)</sup> 毛沢東は、その実践論の巻頭において、まず、マルクス以前の唯物論と、マルクスの唯物論すなわち弁証法的唯物論とをはっきりと区別する。そして、後者のみが真に人間社会と社会的人間を正しく把握させ、認識の社会的実践に対する依存関係を明らかにするものであるとするのである。<sup>(9)</sup>

認識と実践との関係の弁証法的唯物論の基本的考え方は、毛沢東によれば次のようである。

(1) 人間の認識の發展の基本的な来源<sup>(9)</sup> 「マルクス主義者は、人類の生産活動が最も基本的な実践活動であり、他の

すべての活動を決定するものであると考える。<sup>(10)</sup> 「人間の認識は、主として物質の生産活動に依存しており、次第に自然の現象、自然の性質、自然の法則性、人間と自然との関係を理解するようになり、しかも生産活動を通じて、人と人との一定の相互関係をも、次第にさまざまな程度で認識する」<sup>(11)</sup> ようになるものだからである。生産活動こそが、人類の基本的な実践活動であり、それが人間の認識の發展の基本的な来源である。

しかし、「人間の社会的実践は、生産活動という一つの形態に限られるものではなく、その外にも、階級闘争、政治生活、科学および芸術の活動など多くの形式があり、これを要するに、社会の實際生活のすべての領域には、社会的人間が参加しているのである。したがって、人間の認識は、物質生活以外に政治生活、文化生活（これらは物質生活と密接に関連しているのである）からも、人と人とのいろいろな関係を、さまざまな程度で知るようになる」<sup>(12)</sup> とくに、「階級社会では、何人も一定の階級的地位において生活しており」<sup>(13)</sup> 「さまざまな形態の階級闘争が、人間の認識の發展に深い影響を与えるものである」<sup>(14)</sup>

(2) 人間の認識の弁証法的發展<sup>(15)</sup> 人類社会の生産活動は、

低い段階から高い段階へと一步一步発展していくものであるから、社会的実践に依存する人間の認識もまた、低い段階から高い段階へ（浅いところから深いところへ）、一面から多面へと一步一步発展していくものである。すなわち、人間の認識は、社会的実践に依存しながら、歴史的に発展する。マルクス主義では、このように、人間の認識の発展を、弁証法的唯物論<sup>(16)</sup>の立場から理解する。

(3) 人間の認識の真理性をはかる基準<sup>(7)</sup> マルクス主義では、人々の社会的実践だけが、外界に対する人々の認識の真理性の標準である、と考える。社会的実践の過程（物質生産の過程、階級闘争の過程、科学実験の過程）において、人々が頭の中で予想していた結果に到達した場合にだけ、その認識は実証されるものだからである。予想した結果を得るためには、自分の思想を客観的外界の法則性に合致させなければならぬ。そうでないなら実践において失敗するからである。失敗を成功に変えるためには、失敗から教訓をくみとり、自分の思想を外界の法則性に合致するように改めることによって可能となる。人間の認識は、実践から全く離れることのできないものであり、実践しなければ認識は現実性をもたず無意味なものとなる。それ故、弁証法的唯物論の認識論では、

実践を第一の地位に引き上げ、人間の認識は実践から切り離すことのできないものと考えるのである。

マルクス主義の哲学すなわち弁証法的唯物論には、二つの特徴があるが、それは、階級性と実践性である。弁証法的唯物論は、プロレタリア階級に奉仕するものであることを公然と表明しているが、これがその階級性である。その実践性は、実践に対する理論の依存関係、すなわち理論の基礎は実践であり、理論は転じて実践に奉仕するものであることを強調していることをいうのである。認識あるいは理論が真理であるかどうかの判断基準は、人の主観的思惟によるのではなく、客観的な社会的実践の結果にあるのである。

(1) 教条主義というのは、「マルクス主義は教条ではなく行動の指針である」という真理を認めず、マルクス主義の文献の中の字句の切れしを抜きとり、それを以て人々を驚かすに止まり、現実の条件や長い間の中国革命の経験を受け入れることを拒むものという（毛沢東選集一巻四一九頁）。

(2) 経験主義というのは、自分一個の断片的な経験にしがみついて、革命の実践にとつての理論の重要性を理解しないものをいう（毛沢東選集一巻四一九頁）。

(3) 毛沢東選集・第一巻（人民出版社出版）・二五九頁の脚注。毛沢東選集・第一巻（北京・外文出版社）（以下日中文版という）四一九頁。

(4) 毛沢東選集・第一卷二五九頁、日文版四二〇頁。

(5) 毛沢東選集・一卷二五九頁―二六一頁、日文版四二〇頁―四二四頁―岩波文庫版九頁―一頁。

(6) 大月書店版レーニン全集一四卷二八八頁。

(7) 唯物論 (Materialism) は、思惟と存在との關係について、人間の思惟、意識を客観的存在の反映であるとする世界観である。唯物論の歴史は、觀念論 (Idealism) に対する闘争によって貫かれていくが、その發生は、古代ギリシヤの植民地イオニアにおけるいわゆるイオニア学派である。タールス、デモクリトス、エピクロス、ヘラクレイトス等は、その代表的人物である。彼等の唯物論世界観は、社会的実践に対する認識の依存關係を本質的に把握することがなく、今日素朴唯物論と呼ばれるものにすぎなかった。中世紀においては、哲学は神学に支配されてしまった。唯物論が復活したのは、封建社會が解体され、ブルジョアジー (Bourgeoisie) (生産手段を占有している階級) が指導階級として現れてからである。この時期には、唯物論は、ブルジョアジーのイデオロギーとして現れる。デイドロー、エルヴェンス等は、十八世紀の自然科学の發達を基礎に、人間の意識を客観的存在の感覺に及ぼす作用によるものであるとしたが、その論証を力学と数学によって行った機械論にすぎなかった。十九世紀になって、フォイエルバッハによる唯物論哲学が生れた。彼は、自然は意識から独立した存在であり、人間は自然の産物であるとしたが、人間の把握が一般的で、人間の社会性や歴史的發展から離れて認識の問題を考察したので、社会的実践に対する認識の依存關係を理解できなかった。

(8) 毛沢東選集一卷二五九頁、日文版四二〇頁。

中華人民共和国の政治と法律の指導原理としての毛沢東思想 (飯田)

(9) 毛沢東選集一卷二五九頁、日文版四二〇頁。

(10) マルクスは、その著「経済学批判」の序文の中で次のように述べている。「人間は、その生活の社会的生産において、一定の必然的な、自己の意思から独立した諸關係を、すなわち自己の物質的生産諸力の一定の發展段階に照応する諸々の生産關係を受け入れている。これらの生産諸關係の總体が社会の經濟的構造すなわち實在的な基礎を形成するが、その基礎の上には法律のおよび政治的な上部構造が存立し、かつそれには一定の社会的意識形態が照応する。物質的生活の生産様式は、社会的、政治的、精神的な生活過程一般を制約する。人間の意識が人間の存在を決定するのではなくて、逆に人間の社会的存在が人間の意識を決定する。」(Zur Kritik der politischen Ökonomie, Marx, Engels, Werke, B. 13. マルクス・経済学批判, マルクス・エンゲルス全集一三卷、岩波文庫本・武田・遺藤他訳・マルクス経済学批判参照)。

(11) 毛沢東選集一卷二五九―二六〇頁、日文版四二〇頁。

(12)(13)(14) 毛沢東選集一卷二六〇頁、日文版四二二頁。

(15) 毛沢東選集一卷二六〇頁、日文版四二二頁。

(16) 弁証法的唯物論は、マルクス・エンゲルスによって創り上げられたマルクス主義の理論的な基礎である。ヘーゲルの弁証法の方法と、フォイエルバッハの唯物論を、批判的な立場から綜合した上で、科学的に整然と貫かれた運動の法則として、樹立されたものである。自然現象の認識や歴史社会に対する解釈の方法として適切な哲学であるとして、マルクス主義の理論の基本的なものとされている。マルクスによれば、古い唯物論の立場は市民社会であったが、新しい唯物論(弁証法的唯物論)の立場は、人間社会または社会的人間である。

(八三三) 八三三

ある。哲學者達は、世界をいろいろに解釈してきたにすぎず、世界を創り変えるための役割をしなかった。マルクスによつて創始された弁証法的唯物論は、積極的な社会の発展の理論として、また實際生活に必要な行動の指針として樹立された哲学である。マルクス「フョイエルバッハについて」、エンゲルス「自然弁証法」、エンゲルス「フョイエルバッハ論」、マルクス「資本論」岩波文庫版一巻一分冊、レーニン「カール・マルクスの學說とその三つの源泉」を参照。

(17) 毛沢東選集一卷二六一頁、日文版四二二頁―四二三頁。

(二) 認識の發展過程<sup>(1)</sup>

人間の認識が実践から生じ、社会的実践に依存しながら歴史的に發展するものであり、さらに実践に奉仕するものであることは、客觀的事実である。このことは、認識の發展過程をみれば明白となる。それでは、認識の發展過程は、どのようなものであるか、毛沢東はこれを、感性的認識の段階から理性的認識の段階への認識の發展過程<sup>(2)</sup>、理性的認識の發展・完成過程<sup>(3)</sup>に分けて論ずる。

人間の認識は、実践過程から生まれるものである。元來、人間は、はじめのうちは、実践過程の中のそれぞれの事物の現象の面、それぞれの事物の一面、それぞれの事物の間の外部的なつながりだけしか見ることができない。この段階を、

認識の感性的段階、感覺と印象と段階という。この段階では、人々は深い概念を作りあげることもロジカルな結論も引き出し得ない<sup>(4)</sup>。

ところが、社会的実践の継続によつて、実践の中で感覺と印象をくりかえし得ていると、人々の頭脳の中で、認識過程における質的变化がおこり、事物の本質、全体、内部的なつながりをとらえた概念が生れる。概念と感覺とは、単に量的に違いがあるばかりでなく、質的にも違いがある。この概念を用いて、人間は判断や推理をすることができ、この方法を用いれば、論理に合致した結論を生み出すことができる。この段階が認識の第二の段階であり、理性的認識の段階であるという<sup>(5)</sup>。

「認識過程における二つの段階の特質は、低い段階では、認識は、感性的なものとして現われ、高い段階では、論理的なものとして現われるが、どの段階も統一的な認識過程の中の段階であつて、互に初り離されるものではなく、実践という基礎の上で統一されている<sup>(6)</sup>。」すなわち、「感覺は現象の問題を解決するにすぎないものであつて、本質の問題の解決は理論によらなければならないが、いづれの問題の解決においても、実践から離れることはできない<sup>(7)</sup>。」例えば、封建社会

において資本主義社会の法則を事前に認識することはできない。資本主義は現れておらず、その実践がないからである。マルクス主義は、資本主義社会の産物でしかあり得ない。マルクスは、帝国主義時代のいくつかの特殊な法則を具体的に認識することができなかったが、それはマルクスの時代には帝国主義という資本主義の最後の段階が来ておらず、そのような実践がなかったからである。「ある事物を直接に認識しようとするには、現実を変革し、ある事物を変革する実践的闘争に自から参加しない限り、それらの事物の本質を理解することはできない。」<sup>(9)</sup> 知識の問題は科学の問題であり、そこにおいて決定的に必要なのは、誠実さと謙虚な態度である。ほんとうの知識は、すべて直接の経験がその源になっているから、知識を得ようとすれば、現実を変革する実践に参加することが必要である。<sup>(10)</sup> しかし、個人がすべてのことを直接に経験することはできないので、人間は他人が直接に経験したことを、文字と技術による伝達を通じて、間接に知識を得るのである。したがって、一人の人間の知識は、直接経験のもの、間接経験のものとの二つの部分から成立する。間接経験といっても、それは他のいづれかの人にとっては直接経験であるから、知識全体についていえば、どのような知識も、

直接の経験に外ならない。<sup>(11)</sup>

ここで、実践から生れる認識運動を明らかにするためのいくつかの具体的な例、プロレタリア階級の認識の発展、中国人民の認識の発展、戦争に関する指導者の認識などの発展の例を述べる。この例によっても明らかのように、認識が歴史的に発展するものであることが示される。<sup>(12)</sup>

認識の過程は、以上のとおりであるが、ここで、さらに繰り返して、重要な二つのことが指摘されている。その第一点は、理性的認識は、感性的認識に依存するという問題である。理性的なものが信頼できるのは、それが感性を源にしているからであって、そうでなければ、ただ主観的に産出された信頼できないものとなる。観念論者は、理性的認識が感性的認識から離れても得られると考えているが、それは誤りである。唯物論の認識論では、認識過程における社会的実践の意義を強調するが、それは、社会的実践だけが、人間に認識を発生させ、客観的外界から感覚的経験を得させることができるからである。<sup>(13)</sup>

その第二点は、認識の感性的段階は、理性的段階に発展させていくべきものであるということ（認識論の弁証法）である。完全に事物の全体を反映し、事物の本質を反映し、事物



の内部的法則性を反映するには、感覚された豊富な材料(断片的な不完全なものではなく)に、思考の働きを通じて、カスですべての粹をとり、偽をすべてを真を残し、表面から内面へと改造と製作の作業を加えて、概念および理論の体系をつくり上げ、理性的認識へ躍進しなければならぬ<sup>(14)</sup>。

- (1) 毛沢東選集一卷二六一頁―二六五頁、日文版四二二頁―四二八頁。
- (2) 毛沢東選集一卷二六一頁―二七二頁、日文版四二二頁―四三五頁。
- (3) 毛沢東選集一卷二七一頁―二七二頁、日文版四三五頁―四三九頁。
- (4) 同右選集日文版一卷四二二頁。
- (5) 同右選集日文版一卷四二四頁。
- (6) 同右選集一卷二六三頁―二六四頁。日文版一卷四二五頁。
- (7) 同右選集一卷二六三頁―二六四頁。日文版一卷四二六頁。
- (8) 同右選集一卷二六三頁―二六四頁、日文版一卷四二六頁において、この例を掲げ、「マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンがその理論をつくりあげることができたのは、彼らが天才であったという条件の外に、主として自から当時の階級闘争と科学実験という実践に参加したからであり、後者の条件がなければ、どんな天才でも成功できるものではない」と述べている。

(9) 同右選集一卷二六四頁―二六五頁、日文版一卷四二七頁。

(10) 同右選集一卷二六四頁。日文版一卷四二七頁。ここにおいて例を掲げ次のようにいう。「梨の味を知りたければ梨を食することすなわち自分でそれを食べてみることである。」

(11) 同右選集一卷二六四頁下から二六五頁。日文版一卷四二七頁―四二八頁。

(12) この例については、毛沢東選集は日文版一卷四二八頁―四三〇頁を参照。

(13) 同右選集二卷二六七頁、日文版一卷四三二頁。

(14) 同右選集一卷二六七頁―二六八頁、日文版一卷四三二頁―四三三頁。

(三) 理性的認識の実践への発展過程<sup>(1)</sup>

弁証法的唯物論においては、感性的認識から発展して理性的認識が得られるとするが、認識運動は、そこで終わるのではない。マルクス主義では、理論を重要視するが、それは、客観的世界の法則性を理解することによって、世界を説明しうるからではなく、この客観的法則性に対する認識をつかかって、能動的に世界を改造する行動を指導できるからである。正しい理論も、実践を伴わなければ無意味である。認識は実践に始まり、実践を通じて理論的認識に達してから、再び

実践に戻らなければならない。理論的なものが客観的眞理性に合致するかどうかという問題は、理性的認識を再び社会的実践の中にもちかえり、理論を実践に應用して、それが予想した目的を達成できるかどうかを検証することよつてのみ解決される。科学的理論が眞理だといわれるのは、学説がその後の科学的実践によつてその眞理性の裏証がなされたときである。実践は眞理の基準であるとか、「生活、実践の観点は認識論の第一の、そして基本的な観点でなければならぬ」とかいわれる理由はここにある。「理論は、革命の実践と結びつかなければ対象のない理論となる。同様に、実践は、革命の理論を指針としなければ、盲目的な実践となる」と、スターリンが述べているのは正しい。

(1) 毛沢東選集一卷二六八頁—二七〇頁、日文版一卷四三三頁—四三五頁。

(2) レーニン・「唯物論と經驗批判論」第二章第六節を参照。

(3) スターリン・「レーニン主義の基礎」の第三の部分を参照。

#### (四) 認識運動の完成<sup>(1)</sup>——完成の否定

ある発展段階におけるある客観的過程を变革する実践（自然界の過程を变革する実践、社会の過程を变革する実践）に

身を投じて、客観的過程の反映と主観的能動性の作用によつて人々の認識を感性的なものから理性的なものへと推移させ、その客観的過程の法則性にはほ照応する思想、理論、計画あるいは成案をつくりあげ、さらに右の成案をその同じ客観的過程の實踐に應用してみて、予想した目的を實現することができたならば、この具体的な過程についての認識運動は完成したことになる。しかし、一般的にいつて、自然を变革する實踐においても、社会を变革する實踐においても、予想した目的が何の變更もなしに實現されることは極めて少ない。これは、現実の变革にたずさわる人々が、客観的過程の側面および本質が十分に判明していないことからくる制約や、科学的・技術的条件の制約をうけていることによるのである。多くの場合、何度も失敗をくりかえして後に、誤った認識を改めることができ、主観的なものを客観的なものに変えることができ、実践の中で予想した結果が得られるのである。このようになったとき、一応ある発展段階における客観的過程についての人々の認識運動の完成が認められるであらう。<sup>(2)</sup>

しかし、過程は、それが自然界のものも、社会のものも、すべて内部の矛盾と闘争とによつて、さきへさきへと推移し発展するものであるから、人々の認識運動も、それにつれて

推移し発展すべきである。それ故、過程の推移という点からみれば、一応ある発展段階における客観的過程について、実践の中で予想した結果が得られたとしても、人々の認識運動が完成しているものではない。社会運動についていえば、新しい状況の変化に適應するように、革命に参加している人々の認識が急速に変化することが要求されるのである。ところが、人間の認識が多くの社会的条件によつて制約されているために、思想が変化した客観的状况に従つて前進せず、立ち遅れることがよくある。歴史の上では、これは、右翼日和見主義として現れる。すべての頑迷派の思想がもつ特徴であるが、彼らの思想は、社会的実践から遊離しており、前向の指導力に欠け、反動行動をすることしか知らない。また、左翼空論主義として現われることもある。客観的過程の一定の発展段階を正確に認識することができず、当面の現実性から遊離して、幻想を真理だとみなし、将来にしか実現の可能性のない理想を、現在において無理やりに実現しようとして、当面の大多数の人々の実践から遊離するものである。これは、行動の上では冒険主義としてあらわれ<sup>(3)</sup>。

観念論と機械的唯物論、日和見主義と冒険主義は、いづれも主観と客観との分裂、認識と実践との分離を特徴とする。

これらはすべて誤まった思想である。マルクス主義では、宇宙の総体的な発展過程の中で、それぞれの具体的な過程の発展は、すべて相対的なものであるから、それぞれ一定の発展段階にある具体的な過程についての人々の認識には相対的な真理性しかない<sup>(4)</sup>と考へる。客観的過程の発展は、矛盾と闘争にみちた発展であるから、人間の認識運動の発展も矛盾と闘争にみちた発展である。そして、社会的実践における発生、発展、消滅の過程は無限につづき、したがつて、人間の認識の発生、発展、消滅の過程もまた無限につづくものである。マルクス・レーニン主義は、真理に終止符をうつものではなく、実践の中で絶えず真理を認識する道をきり開いていくものである。主観と客観、理論と実践、知と行との具体的な歴史的な統一を主張するものであつて、具体的な歴史から遊離した、あらゆる「左」と「右」の誤つた思想に反対する<sup>(4)</sup>。

(1) 毛沢東選集一卷二七〇頁三行目以下二七二頁下から七行目まで。日文版一卷四三五頁―四三九頁。

(2) 毛沢東選集日文版一卷四三五頁―四三七頁。

(3) 同右、一卷四三七頁―四三八頁。

(4) 同右、一卷四三八頁―四三九頁。

(五) プロレタリア階級と革命的の人民の世界改造の責務<sup>(1)</sup>

社会が今日の時代にまで発展してくると、世界と中国の暗黒面を全面的にくつがえして、これまでになかったような光明の世界に変えることが、プロレタリア階級とその政党の肩にかかっていることが知られる。この世界改造の闘争には、客観的世界を改造し、自己の主観的世界を改造し（自己の認識能力を改造し）、主観的世界と客観的世界との関係を改造するという任務の実現が含まれている。改造される客観的世界の中には、改造に反対するあらゆる人々が含まれており、彼らが改造されるには、強制の段階を経なければならないし、その中にはじめて自覚的段階に進むことができる。

(1) 毛沢東選集一卷二七二頁—二七三頁、日文版一卷四三九頁—四四〇頁。

#### (六) 総括

「実践を通じて真理を発見し、さらに実践を通じて真理を実証し、真理を発展させる。感性的認識から能動的に理性的認識に発展し、さらに理性的認識によって能動的に革命的实践を指導し、主観的世界と客観的世界を改造する。実践、認識、再実践、再認識というこの形式が循環往復して無限にくりかえされ、実践と認識の一循環ごとの内容は、みなより一段と

高い段階に進んでゆく。これがすなわち弁証唯物論の認識論の全体であり、これが弁証唯物論の知行統一観である。」

(1) 毛沢東選集一卷二七三頁、日文版四四〇頁。

実践論は、以上で終わるのであるが、これから次のような法思想を引き出すことができる。

(一) 法律・制度は、その制度の中における実践活動を通じて、その本質を明らかにすることができる。<sup>(1)</sup>

(二) 被支配階級に属する人民は、意識的、組織的な経済闘争、政治闘争の時期になると、法律・制度が支配階級の利益の擁護のためのものにすぎないことをさとる。そして、階級が階級を支配する法律・制度という客観世界の構造を改革し、人民の願望を完成させるための道具、仕組としての法律・制度に変化させなければならないと考えるに至る。<sup>(2)</sup> かくして、被支配階級は、革命行動を通じて、自からの願望を法へと転化させる。人民の法（人民の願いの表現）<sup>(3)</sup> が形成され、支配者の法と対立するに至る。

(三) 人民の法は、階級闘争の実践を通して認識され形成されるが、客観世界の改造・変革は進展するものであるから、人民の法もまた停滞することなく発展しなければならない。ここに社会主義法制の本質がある。

(1) 毛沢東・中国革命戦争の戦略問題・毛沢東選集第一巻一六五頁—一六六頁(日文版・二六六頁)……「軍事上の法則は、他の事物の法則と同じように、客観的实际(真实の情况および実践の兩者を指称する)のわれわれの頭脳への反映である。われわれの頭脳以外のすべては、客観的实际である。」これは、エンゲルスの「反デューリング論」において指摘された「人間の思想は客観的存在の反映であり、すべての真の知識は経験をその源としている」とする唯物論の反映論を根拠にしている。

毛沢東・「農村調査」のはしがきとあとがき(一九四一年三月一日)、毛沢東選集三巻七四九頁八行目以下。日文版三巻六頁。

「すべての实际活動家は、下部について調査しなければならぬ。理論だけで、実際の状況を知らない人にとっては、このような調査活動がとりわけ必要であり、そうでなければ理論を实际と結びつけることはできない。調査がなければ発言権はな。」

(2) 毛沢東・湖南省農民運動の視察報告・毛沢東選集第一巻一六頁—一七頁(日文版二五頁—二七頁)……「たしかに、農民は農村でいささか乱来(はめをはづしている)などところがある。……したいほうだいのことをやり、なにもかも常軌をはずし、農村に一種の恐怖現象さえつくり出している。これが一部の人たちのいう過分(ゆきすぎ)であり、矯枉過正(あやまりを正すのに度をこしたこと)であり、未免太不成話(まったくなっていないこと)である。……さきへのべたようなことは、いずれも土豪劣紳や不法地主自身がそのように追いつめたのである。……いままでその勢力をたのみにしてのさばり、農民をふみつけてきたからこそ、農民は、このように大きな反抗をするのである。……だがが悪らつで、だがが悪らつで

ないか、だがもつともひどく、だががそれほどでもないか、だれはきびしく処罰し、だれは軽くよいか、それを農民は非常にはっきり計算しており、不当な処罰をするようなことはめつたにない。……革命は暴動であり、一つの階級が他の階級をうちたおす激烈な行動である。農村革命は、農民階級が封建地主階級の権力をうちたおす革命である。……さきに述べたようないわゆる「ゆきすぎ」の行動は、すべて農村で大きな革命の激流によって振り立った農民の力が産み出したものである。こうした行動は、農民運動の第二期(革命の時期)には、大いに必要なことである。……あやまりは正せないのである。」毛沢東の湖南省農民運動報告は、一九二七年三月に書かれたものである。この報告書は、読者をして、支配者の法の外に被支配者の立場からの法があることを、また、人間社会

にとつて、どのような見方が正当なものであるかを、知らしめる。

(3) 毛沢東・湖南省農民運動の視察報告・毛沢東選集第一巻一五頁—一六頁(日文版二三頁—二五頁)……「同族支配体系の封建的な土豪劣紳と不法地主階級は、何千年来の専制政治の基礎であり、帝國主義、軍閥、汚職官吏の足場である。この封建勢力をくつがえすことこそ、国民革命の真の目標である。孫中山先生が、四十年も国民革命に力をつくして、やろうとしてやれなかったことを、農民は数カ月のうちにやりとげた。……これはすばらしいことだ。……これを「むちやくちやだぐ」などととんでもない。これを「むちやくちやだぐ」というのは、……封建的なふるい秩序を維持し、民主的な新しい秩序の確立を妨害しようとする地主階級の理論であり、……すばらしい。これは、農民やその他の革命派の理論である。」

### 三 矛盾論

矛盾論は、一九三七年八月に、中国共産党内に存在する教条主義思想を克服するために書かれたものである。実践論では項目を分けないで叙述されたが、矛盾論では、序言に相当する部分に次いで、一、二つの宇宙観、二、矛盾の普遍性、三、矛盾の特殊性、四、主要な矛盾と主要な矛盾の側面、五、矛盾の諸側面の同一性と闘争性、六、矛盾における敵対的地位、七、結論、の七個の題名を付して項目を分けて論ぜられている。中国文B五版三八頁、日文五六頁の論文であるが、その内容を要約すれば、次のとおりである。

事物の矛盾の法則——対立面の統一の法則は、唯物弁証法の最も根本的な法則であり、これを研究することによって、マルクス・レーニン主義の基本原則を知ることができる。唯物弁証法を根本的に理解するためには、二つの世界観、矛盾の普遍性、矛盾の特殊性、主要な矛盾と矛盾の主要な側面、矛盾の諸側面の同一性と闘争性、矛盾における敵対の地位について、はっきりさせることが必要である。<sup>(1)</sup>

ソ連の哲学界で、批判されてきたデボリン学派の観念論が中国共産党内の教条主義思想に影響を及ぼしている。した

がって、哲学研究活動において教条主義思想の掃蕩を主な目標にしなければならない。<sup>(2)</sup>

(一) 二つの世界観<sup>(3)</sup> 人類の認識史には宇宙の発展法則についての二つの見解——形而上学的な見解と弁証法的な見解——が存在してきた。形而上学は観念論的な世界観に属するブルジョア階級の初期の唯物論は、形而上学であった。工業プロレタリア階級が歴史を發展させる最大の原動力になったことによって、マルクス主義の唯物弁証法的世界観が生れた。<sup>(4)</sup> 形而上学の世界観は、世界を孤立的、静止的、一面的観点でみるものである。この世界観では、世界のすべての事物、その形態と種類を永遠にそれぞれ孤立した永遠に変化することのないものとみなしている。変化があるとしても、それは、ただ量の増減と場所の変動にすぎず、しかもその原因は、事物の外部にある力によって動かされるものだとしている。(このことを、地理、気候など社会外部の条件によって説明する。) そして、事物の發展が内部矛盾によって引き起されると主張する唯物弁証法の学説を否定する。こうした思想はヨーロッパでは、一七一一八世紀における機械的唯物論となつて現れ、一九世紀末から二〇世紀始めには、俗流進化論となつて現れた。<sup>(5)</sup>

唯物弁証法の世界観は、事物の発展を事物の内部の必然的な自己運動とみなす。そして、一つ一つの事物の運動は、すべてその周囲の他の事物と互に連繋しあい、影響しあっているものとみる。事物の発展の根本原因は、事物の内部の矛盾性にあるとみる。社会の発展は、主として外因によるのではなくて内因によるのである。多くの国は、ほとんど同様の地理的、気候的条件の下にあるが、その発展の相違性と不均等性は非常に大きい。このような現象が生ずるのは、社会の変化が、主として社会の内部矛盾の発展、すなわち、生産力と生産関係との矛盾、諸階級間の矛盾、新しいものと古いものとの間の矛盾によるものであり、これらの矛盾の発展によって社会の前進がうながされ、新旧社会の新陳代謝がうながされるからである。すなわち、唯物弁証法では、外因を変化の条件、内因を変化の根拠とし、外因は内因を通じて作用するものと考ええる。この弁証法的世界観は、主として、さまざまな事物の矛盾の観察と分析に熟達すると同時に、その分析に基いて矛盾の解決方法を見出すように、人々に教えている。<sup>(6)</sup>

二 矛盾の普遍性 矛盾の普遍性(絶対性)には、二つの意味がある。その一つは、矛盾があらゆる事物の発展の過

程に存在するということである。他の一つは、どの事物の発展の過程にも始めから終りまで矛盾の運動が存在するということである。<sup>(7)</sup> 矛盾は、単純な運動形態の基礎であり、それ以上に複雑な運動形態の基礎である。<sup>(8)</sup> 人間の持っている概念の一つ一つの差異は、すべて、客観的矛盾の反映とみなされなければならない。客観的矛盾が主観的な思想に反映して概念の矛盾運動を形成し、思想の発展を促がし、人々の思想問題を絶えず解決していくものである。<sup>(9)</sup> 新しい過程の発生は、古い統一とその統一を構成する対立的要素とが、新しい統一とその統一を構成する対立的要素に席を譲って、新しい過程が古い過程にとって代って発生することである。<sup>(10)</sup>

(三) 矛盾の特殊性 物質のいろいろな運動形態の中の矛盾は、いづれも特殊性をもっている。人間が物質を認識するということは、物質の運動形態を認識することである。物質の運動形態については、すべての運動形態に共通のところがあるが、事物の認識の基礎となるものは、その事物の特殊な点である。ある事物とその他の事物の運動形態との質的な違いが事物を区別することを可能にする。その質的な違いというのは、それぞれの事物の運動形態の内部に含まれているそれ自身の矛盾の特殊性をいう。この特殊な矛盾がある事物を

他の事物から區別する特殊な本質を構成している。<sup>(11)</sup>

個々の社会形態、思想形態は、それぞれその特殊な矛盾と特殊な本質をもっている。そして、個々の特殊の事物の認識から一般的な事物の認識へと拡大し、共通の本質の認識をする。さらに、これを手引としてさまざまな具体的事物に対する研究を進め、その特殊な本質をさがし出す。そして、共通の本質の認識を補足し、豊富にし、発展させる。人類の認識は、特殊から一般へ、一般から特殊へと、つねに循環しながら進むものである。その一循環ごとに人類の認識を一步一步高め、深めていく。<sup>(12)</sup>

質の異なる矛盾は、質の異なる方法でしか解決できない。<sup>(13)</sup>事物の発展過程における矛盾のそれぞれの側面の特殊性をあらわさなければ、その矛盾が全体の上で、相互に結びつきの上でもっている特殊性をあらわさ出すことはできない。<sup>(14)</sup>

事物の発展過程における根本的矛盾と、この根本的矛盾によって規定される過程の本質は、その過程が完了するときでなければ消滅しない。<sup>(15)</sup>たとえば、自由競争時代の資本主義は、発展して帝国主義となるが、このときも、プロレタリア階級とブルジョア階級という根本的に矛盾する二つの階級の性質およびこの社会の資本主義の本質は変化していない。しかし、

事物の発展過程における根本的矛盾の性質と過程の本質には変化がなくても、長い過程でのそれぞれの発展段階で、根本的矛盾が次第に激化する形式をとるから、それぞれの発展段階は、その状況が互に異なり、段階性が現れるものである。<sup>(16)</sup>例えば、辛亥革命から始まった中国のブルジョア民主主義革命の過程の状況について見ても、いくつもの特殊な段階がある。とくに、ブルジョア階級が指導した時期の革命と、プロレタリア階級が指導する時期の革命とは、大きなちがいのある二つの歴史的段階として区別される。<sup>(17)</sup>

事物の発展過程の、それぞれの発展段階における矛盾の特殊性は、その相互の結びつきの上で、その全体の上で、それを見るを要するばかりでなく、それぞれの段階における矛盾のそれぞれの側面から見なければならぬ。<sup>(18)</sup>そして、矛盾の特性の研究にあたっては、主観的任意性を帯びてはならないとともに、具体的な事物について具体的な分析をしなければならぬ。<sup>(19)</sup>

矛盾の普遍性と矛盾の特殊性との関係は、矛盾の通性と個性との関係である。しかし、この通性は、あらゆる個性の中に含まれており、個性がなければ通性はない。矛盾は、それぞれ特殊であるから、個性が生れるのである。すべての個性



は、条件的、一時的存在であり、したがって相対的である。<sup>(20)</sup>  
この通性と個性、絶対と相対との道理は、事物の矛盾の問題の真髓である。<sup>(21)</sup>

(四) 主要な矛盾と矛盾の主要な側面<sup>(22)</sup> 複雑な事物の発展過程には、多くの矛盾が存在しているが、その中では、必ず一つが主要な矛盾であり、その存在と発展によって、その他の矛盾の存在と発展が規定され影響される。その例として、(イ)資本主義社会ではプロレタリア階級とブルジョア階級との間の矛盾が主要矛盾であり、その他の矛盾は主要矛盾の力によって規定され影響されること、(ロ)帝国主義の侵略戦争時には、侵略者と被侵略国との間の矛盾が主要矛盾であり、被侵略国内のあらゆる矛盾は副次的なものになっていること、また(ハ)帝国主義が戦争によらず、政治、経済、文化などの形式で圧迫し、半植民地国の支配階級が帝国主義に投降し、両者が同盟して、人民大衆を圧迫する場合には、帝国主義と封建階級との同盟に対する人民大衆との間の矛盾が主要矛盾となり、しばしば国内革命戦争の形式が現れること、その他が示されている。<sup>(23)</sup>

いずれにしても、主要な矛盾だけが過程の発展のそれぞれの段階で指導的な作用を起すものであることは、全く疑いの

ないところである。<sup>(24)</sup>それ故、過程の中のすべての矛盾を同等にあつかってはならないし、それらを主要なものと同副次的なものに類別し、主要な矛盾をつかむことに重点を置かなければならない。<sup>(25)</sup>しかし、矛盾の主要な側面と主要でない側面とは固定したものではなく、互に転化しあい、事物の性質もそれにつれて変化する。<sup>(26)</sup>(ここで、主要矛盾と副次的矛盾の相互転換の例として、資本主義社会や中国の状況についての説明がなされている。)<sup>(27)</sup>

革命闘争において、困難な条件の方が順調な条件より大きい場合には、困難の方が矛盾の主要な側面で、順調の方が副次的な側面である。しかし、困難な条件も革命党員の努力によって次第に克服されるときは順調な局面に変えることができる。<sup>(28)</sup>その例として、一九二七年の中国革命失敗後の状況や、長征中の中国赤軍の状況などが挙げられる。<sup>(29)</sup>

次に、「生産力と生産関係との矛盾では生産力が主要なものであり、理論と実践との矛盾では実践が主要なものであり、経済的土台と上部構造との矛盾では経済的土台が主要なものであって、それらの地位は相互転化するものではない」と考へる人があるが、このような見解は、機械的唯物論の見解であって、<sup>(30)</sup>正しくない。「政治や文化などの上部構造が経済的

基礎の発展を阻害しているときには、政治上および文化上の革新が主要な決定的なものとなる<sup>(31)</sup>と考えるのが弁証法的唯物論にかなうものである。何故ならば、歴史発展の総体の中では物質的なものが精神的なものを決定し、社会的存在が社会的意識を決定することが認められるが、同時にまた精神的なものとの反作用、社会的意識の社会的存在に対する反作用、上部構造の経済的基礎に対する反作用も認められ、認めなければならぬ<sup>(32)</sup>からである。

(四) 矛盾の諸側面の同一性と闘争性<sup>(33)</sup> 事物の発展過程におけるそれぞれの矛盾のもつ二つの側面は、それぞれ自己と対立する側面を自己の存在の前提としており、双方が一つの統一体の中に共存している。そして、矛盾する側面は、一定の条件によってそれぞれ反対の側面に転化していく。これが同一性といわれるものである<sup>(34)</sup>。すべての矛盾している側面は、一定の条件によって、不同一性を具えているので、矛盾とよばれる。しかしまた同一性を具えているので、互に連結し合っている<sup>(35)</sup>。矛盾する双方が互に存在の条件となり、双方の間に同一性があり、したがって一つの統一体の中に共存することができる<sup>(36)</sup>。これが同一性の第一の意義であるが、矛盾の同一性には第二の意義がある。事物の内部の矛盾する両側面は、

一定の条件によって、それぞれ自己と反対の側面に転化してゆく<sup>(37)</sup>ことが、それである。その一例が、被支配者であったプロレタリア階級が革命を通じて支配者に転化し、もと支配者であったブルジョア階級は、被支配者に転化していくことにもみられる。このほか、土地革命における地主と農民の関係、プロレタリア独裁と独裁の解消の関係、戦争と平和の関係などいろいろの例が挙げられている。

矛盾しているすべてのものは、互に連結し合っており、一定の条件の下で一つの統一体の中に共存していること、また一定の条件の下では互に転化し合うこと、これが矛盾の同一性のもつ意義のすべてである。一定の必要な条件がなければ、どんな同一性も存在しない。

矛盾の諸側面の同一性は以上のようなもので、対立面の統一は、条件的、一時的、径過的、相対的である。しかし、互に排斥し合う対立面の闘争は、発展、運動が絶対的であるように、絶対的である<sup>(38)</sup>。どんな事物の運動も、相対的に静止している状態と著しく変動している状態という二つの状態をとるが、この二つの状態の運動は、いずれも事物の内部に含まれる二つの矛盾する要素の相互の闘争によって惹起される。事物の運動が相対的に静止している状態にあるときは、質的

変化がないので静止しているような様相を呈する。ところが事物の運動が著しく変動している状態にあるときは、質的变化が最高点に達し、統一物の分解を引き起しているので、著しい変化の様相を顕出する所以である。前者の状態から後者の状態に絶えず転化するもので、矛盾の闘争がこの二つの状態の中に存在する。(39)

条件的、相対的同一性と、無条件的、絶対的闘争性とは相結合して、すべての物事の矛盾運動を構成する。(40) 中国人のよくいう言葉に、「相反相成」というのがあるが、これは、互に反し合うものが同一性をもっているという意味である。闘争性は、同一性の中に宿っており、闘争性がなければ同一性はない。(42)

(六) 矛盾の中にある対抗の地位(43) 矛盾の闘争性の問題には、対抗とは何であるかという問題が含まれている。(44) 対抗は矛盾闘争の一種の形式であって、矛盾闘争のすべての形式ではない。人類の歴史においては、階級的な対抗が存在するが、これは、矛盾闘争の一種の特殊的表现である。(45) 階級社会では、革命と革命戦争が不可避であり、これにおいては社会発展の飛躍を完成することができず、反動的統治階級を押し倒して、人民に政権を獲得させることもできない。(46) しかし、

この公式をむりやりにすべてのことにあてはめてはならない。矛盾と闘争とは、普遍的、絶対的であるが、矛盾を解決する方法すなわち闘争の形式は、矛盾の性質の不同によって相異なる。いくらかの矛盾は公開的対抗性をそなえているが、そうでない矛盾もある。事物の具体的発展に基いて、いくらかの矛盾は、もともと非対抗性であったものが発展して対抗性のものに成り、またいくらかの矛盾は、もともと非対抗性をもつものであって、発展して非対抗性のものとなるのである。(47) 例えば、共産党内の正しい思想と誤った思想との矛盾は、階級が存在する時期においては、これは階級矛盾の党内への反映であるが、この種の矛盾は初期とか個別の問題にあっては、すぐに対抗性のものとなってあらわれるとは限らない。しかし階級闘争が発展するにつれて、この種の矛盾もまた発展して対抗性のものになり得るのである。(48) ソ連共産党や中国共産党の歴史には、こうした状況があった(レーニン・スターリンの思想とトロツキー・ブハーリンの思想との矛盾、毛沢東の思想と陳独秀・張國燾・劉少奇の思想との矛盾は発展して対抗性のものとなった)。

「対抗と矛盾とは全く異なったものである。社会主義の下では対抗は消滅するが、矛盾は存在し続ける。」(49) このレーニン

の言葉は、対抗が矛盾闘争の一種の形式にすぎず、そのすべてではないから、右の公式を手当り次第あてはめることはできないことを述べているものである。

- (1)(2) 毛沢東選集一卷二七四頁、日文版一卷四四三頁―四四四頁。
- (3) 同右、二七五頁以下、日文版四四四頁以下。
- (4) 同右、二七五頁。日文版四四四頁―四四五頁。
- (5) 同右、二七五頁―二七六頁、日文版四四五頁―四四六頁。
- (6) 同右、二七六頁―二七九頁、日文版四四六頁―四五〇頁。
- (7) 同右、二八〇頁二行目以下、日文版四五二頁。
- (8) 同右、二八〇頁二行目、日文版四五二頁。
- (9) 同右、二八一頁二行目以下、日文版四五三頁。
- (10) 同右、二八二頁下から九行目以下、日文版四五四頁。
- (11) 同右、二八三頁下から八行目―二八四頁一行目、日文版四五六頁。
- (12) 同右、二八四頁―二八五頁。日文版四五七頁―四五八頁。
- (13) 同右、二八六頁一行目。日文版四五九頁。「例えば、プロレタリア階級とブルジョア階級との矛盾は、社会主義革命の方法により、人民大衆と封建制度との矛盾は、民主主義革命の方法により、植民地と帝国主義との矛盾は、民族革命戦争の方法により、社会主義社会における労働者階級と農民階級との矛盾は、農業の集団化と農業の機械化の方法によって、共産党内の矛盾は批判と自己批判の方法によって、社会と自然との矛盾は、生産力を発展させる方法によって、解決される。」選集日文版四五九頁。
- (14) 同右、二八六頁九行目以下。日文版四六〇頁。

中華人民共和国の政治と法律の指導原理としての毛沢東思想(飯田)

(九七) 九七

- (15)(16) 同右、二八九頁。日文版四六四頁。
- (17) 同右、二八九頁最下行―二九〇頁。日文版四六五頁。
- (18) 同右、二九〇頁下から七行目以下。日文版四六六頁。
- (19) 同右、二九二頁中段参照。日文版四六八頁参照。
- (20) 同右、二九四頁―二九五頁一行目。日文版四七一頁。
- (21) 同右、二九五頁。日文版四七一頁。
- (22) 同右、二九五頁―三〇一頁。日文版四七二頁―四八〇頁。
- (23) 同右、日文版四七二頁―四七四頁。
- (24) 同右、日文版四七四頁。
- (25) 同右、日文版四七四頁。
- (26) 同右、日文版四七五頁。
- (27) 同右、日文版四七六頁―四七八頁。
- (28)(29) 同右、日文版四七八頁。
- (30) 同右、日文版四七九頁。
- (31) 同右、三〇〇頁下から六行目―八行目。日文版四七九頁。
- (32) 同右、三〇〇頁―三〇一頁。日文版四八〇頁。
- (33) 同右、三〇一頁―三〇八頁。日文版四八一頁―四九〇頁。
- (34) 同右、日文版四八一頁参照。
- (35)(36)(37) 同右、三〇三頁。日文版四八三頁参照。
- (38) レーニンの「弁証法の問題について」から引用。
- (39) 毛沢東選集三〇六頁下から二行目―三〇七頁。日文版四八八頁―四八九頁参照。
- (40) 同右、三〇七頁下から三行目―四行目。日文版四九〇頁三行目以下。
- (41) 班固の「前漢書」卷三〇「藝文志」にある。

原文は次のようである。「諸子十家、其可觀者、九家而已。皆起于王道既微、諸侯力政、時君世主、好惡殊方。是以九家之術、讎出并作、各引一端、崇其所善、以此馳說、取合諸侯。其言雖殊、辟猶水火、相滅亦相生也。仁之与義、敬之与和、相反而皆相成也。」

- (42) 毛沢東選集一卷三〇七頁最下行—三〇八頁四行目参照。
- (43) 毛沢東選集一卷二〇八頁—三一〇頁。日文版一卷四九〇頁—四九三頁。
- (44) 毛沢東選集一卷三〇八頁。日文版四九〇頁。
- (45) 同右、三〇八頁。日文版四九一頁。
- (46) 同右、三〇九頁一行目。日文版四九一頁。
- (47) 同右、三〇九頁六行目—二行目。日文版四九二頁参照。
- (48) 同右、三〇九頁—三行目—三一〇頁三行目参照。日文版四九二頁—四九三頁参照。
- (49) レーニンが、プハーリンの「過渡期の経済学」に対してした評注を見よ。

矛盾論の内容は、右に抜粋したところに尽きるのであるが、これが、中国革命の法原理としてどのようにあらわれるかは、一九五七年二月二七日、最高国務會議第一一回(拡大)會議における毛沢東の講話(一九五七年六月一九日付の人民日報に発表)によって、明らかにされる。

#### 四 矛盾の処理原則——中国法制の法原則

社会主義社会になっても、矛盾はなくなることはないことは、矛

盾論において、レーニンの言を引用しつつ論断されているところである。また、実践論において、客観的法則性の認識を用いて能動的に、客観的世界、主観的世界およびこの両者の関係を改造する実践行動の指針を示すものがマルクス・レーニン主義であることが指摘せられている。このことから、社会主義社会における法原則は、人民内部の矛盾を正しく処理するための問題そのものに関するものであること、および社会主義社会の建設途上においては、敵味方の矛盾(對抗矛盾)の正しい処理に関することも含まれることが知られるであろう。

矛盾論において、矛盾には對抗性の矛盾と非對抗性の矛盾とがあり、矛盾を解決する方法は、矛盾の性質の違いによつ異ならなければならないことが指摘されていることは、前述したとおりである。この矛盾論を實踐との関係で一そう實際的に取り上げて論述されたのが、一九五七年二月二七日の毛沢東の最高国務會議第一一回會議での講話「人民内部の矛盾を正しく処理する問題について」である。その内容は、十二の小題目に分けて述べられ、人民内部の矛盾(非對抗性矛盾)の処理方法の討議に重点が置かれているが、敵味方の矛盾(非對抗性矛盾)の処理方法も示されている。

(一) 性質の異なった二種類の矛盾 「マルクス主義の哲学では、対立面の統一の法則が宇宙の根本法則であるとしている。」「矛盾する対立面は、統一しつつ闘争し、これによって事物の運動と進化を推進する。」「具体的事物についていえば、対立面の統一は、条件的、一時的、過渡的であり、したがって相対的であるが、対立面の闘争は、絶対的である。」

資本主義社会の矛盾は、はげしい対抗と衝突となって現われ、激しい階級闘争となって現われるが、この矛盾は、社会主義革命によらなければ解決できない。社会主義社会における矛盾も基本的なものは生産関係と生産力との間の矛盾であり、上部構造と経済的基礎との間の矛盾であり、抽象的觀念的にみれば資本主義社会の矛盾と同様にみえるが、具体的にみれば、社会主義の矛盾と資本主義社会の矛盾とは、根本的に異なった性質と状況とを具えている。すなわち、社会主義の生産関係は、資本主義のそれに比較して一そうよく生産力発展の性質に照応することができるものであり、このことは、中国の生産力の飛躍的な発展を促進していることにより認めないわけにはいかない。<sup>(3)</sup>

中国においては、社会主義建設が成功するための基本的な保証である国家の統一、人民の団結、国内諸民族の団結が成

功している。しかし、このことは、中国社会にはどのような矛盾もなくなったということの意味しない。「敵味方間の矛盾」と「人民内部の矛盾」という性質の全く異なった二種類の矛盾が存在する。<sup>(4)</sup>

敵味方間の矛盾（対抗矛盾）と人民内部の矛盾という種類の異なった矛盾を正確に認識するためには、何が人民か、何が敵かを明確にさせなければならない。人民の概念は、国家が異なれば異なるし、それぞれの国家について見ても、歴史的時期を異にすれば、異なった内容をもっているものである。<sup>(5)</sup>中国についていえば、「抗日戦争の時期には、日本帝国主義と戦かうすべての階級、階層、社会集団はすべて人民の範囲に属し、日本帝国主義、民族の裏切り者、親日派はみな人民の敵であった。解放戦争の時期になると、アメリカ帝国主義とその手先の官僚ブルジョア階級、地主階級およびこれらの階級を代表する国民党反動派がみな人民の敵であり、これらの敵に反対するすべての階級、階層、社会集団はすべて人民の範囲に属した。現段階すなわち社会主義建設の時期においては、社会主義建設の事業に賛成し、これを支持し、これに参加するすべての階級、階層、社会集団がすべて人民の範囲に属し、社会主義革命に反抗し、社会主義建設を敵視し、

破壊するすべての社会勢力、社会集団はすべて人民の敵である。<sup>(6)</sup>

「敵味方の間の矛盾は、対抗性を具える矛盾である。人民内部の矛盾は、勤労人民の間では非対抗性のものであるが、被搾取階級と搾取階級との間では、対抗性の面と非対抗性の面とがある。」中国の民族ブルジョア階級は、帝国主義、地主階級、官僚ブルジョア階級とは異なり、中華人民共和国の憲法を擁護し、社会主義的改造をうけ入れようとする一面をもっているから、人民の範囲に属する。それ故、中国では、労働者階級と民族ブルジョア階級との間の矛盾は、人民内部の矛盾に属する。この両階級の間には搾取・被搾取の矛盾が存在しており、この矛盾は本来は対抗性の矛盾である。しかし、この二つの階級間の対抗性の矛盾は、処理が適切であれば、非対抗性の矛盾に転化し、平和的な方法によって解決することができものである。<sup>(7)</sup>

敵味方の間の矛盾の解決方法は、敵と味方とを明確に見わけることが先決問題であり、敵性分子に対してはプロレタリア独裁を行なう。<sup>(8)</sup>しかし、人民内部の矛盾の解決方法は、團結の願いから出発し、批判または闘争を通じて是非を明らかにし、あたらしい基礎の上であたらしい團結に達する方法で

あり、その手段として、討論の方法、批判の方法、説得と教育の方法をとるものである。<sup>(10)</sup>

中華人民共和国は、労働者階級が指導する労働同盟を基礎とする人民民主專政の国家である。<sup>(11)</sup>この專政（独裁）は二つの機能をもつ。第一の機能は、国内の敵性分子を抑圧することと、すなわち国内の敵と味方との間の矛盾を解決することである。例えば、反革命分子の逮捕・処罰、地主階級分子や官僚ブルジョアジー分子に対する一定期間の選挙権・言論發表の自由権の剝奪などは、專政（独裁）の範囲に属する。社会秩序と広範囲の人民の利益を護るためには、窃盜犯、詐欺犯、殺人、放火犯、与太者グループ、社会秩序を甚だしく破壊するさまざまな悪質分子に対しても、專政（独裁）を実行することが必要である。<sup>(13)</sup>專政（独裁）の第二の機能は、国外の敵の侵略を防ぐことにある。<sup>(14)</sup>対外的に敵と味方の間の矛盾を解決する任務を負うことである。<sup>(15)</sup>

專政（独裁）の目的は、全人民が平和に働き、中国を現代的工業、現代的農業、現代的科学・文化をもった社会主義に建設することを、守ることにある。<sup>(16)</sup>專政（独裁）を行なう者は、「労働者階級とその指導の下にある人民」である。<sup>(16)</sup>人民が自分自身に対して独裁を行なうこ

とはできないのだから、専政（独裁）の制度は、人民の内部には適用されない。また一部の人民が他の一部の人民を抑圧するようなことは許されない。いうまでもなく、人民の中の法に違反した者も法律による制裁をうけなければならないが、このことは人民の敵を抑圧する独裁とは原則的に区別される。<sup>(17)</sup>

矛盾の正しい処理方法として、人民の内部では、民主集中制が実践される。中華人民共和国憲法は、中華人民共和国の公民に、言論、出版、集会、結社、街頭行進、示威運動、宗教信仰などの自由を保障している。<sup>(18)</sup> また、国家机关のあり方についても憲法は規定し、国家机关は民主集中制を履行し、<sup>(19)</sup> 人民大衆に依拠し、<sup>(20)</sup> 国家机关の要員（国家公務員）は人民に奉仕しなければならないとしている。<sup>(21)</sup> しかし、この場合の「自由」は、「指導のある自由」であり、「民主」は「集中にみちびかれた民主」であって、無政府状態ではない。<sup>(22)</sup> また、この「自由」「民主」は、自由主義的議会民主主義制度における抽象的な自由、民主ではない。抽象的・観念的な自由・民主は、ブルジョア階級の独裁を維持する一方法にすぎず、被搾取階級である勤労人民の自由権を具体的に保障するものではない。<sup>(24)</sup> 抽象的な自由、抽象的な民主を要求する人々は、民主と自由を目的と考へ、手段とは認めないが、民主というものは、

実際には一つの手段に過ぎないものである。すなわち、民主も自由も「歴史的に発生し発展する相対的なものであって、いづれも経済的基礎のために奉仕するものである。」<sup>(25)</sup> 「人民は効果的に生産を行ない、学習を行ない、秩序だった生活を送るために、政府や生産面・文化・教育面の指導者に対して、強制を伴なういろいろな適切な行政命令を出すように要求する。このような行政命令がなければ社会秩序も維持しようがないことは、人々が常識として知っていること」だからである。<sup>(26)</sup>

「このことと、説得・教育の方法による人民内部の矛盾の解決とは、相互に補い合う二つの側面である。」<sup>(27)</sup> それ故「社会秩序を維持する目的で出される行政命令も、説得と教育とともになわなければならない。」<sup>(28)</sup> 「人民内部の矛盾を解決する民主的な方法を公式化すれば、「団結——批判——団結」となる。団結の願いから出発し、批判または闘争を通じて矛盾を解決し、これによって、新しい基礎の上で新しい団結に達する。」<sup>(29)</sup> という方法である。「無慈悲な闘争、容赦のない打撃」<sup>(30)</sup> という左翼教条主義者をとった方法は誤っている。「マルクス主義者は、一貫して、プロレタリア階級の事業は人民大衆に依拠するほかはなく、共産党員が勤労人民の中で活動する場合、民主的な説得と教育の方法をとるべきで、命令主義的



な態度や強制的な手段をとることは決して許されないと考え  
てきた。<sup>(31)</sup> 中国共産党は、このマルクス・レーニン主義の原  
則を忠実に守っている。「人民内部における民主の面と、反  
動派に対する独裁の面とが結びついたものが、人民民主独裁  
である」が、「人民内部の問題の解決にあたって用いる方法は、  
民主の方法つまり説得の方法であって、強制の方法ではな  
い。」<sup>(32)</sup>との考え方が維持されている。人民民主主義専政の国家  
制度と法律、マルクス・レーニン主義を指導原理とする社会  
主義的意識形態、これらの上部構造は、中国の社会主義改造  
の勝利と社会主義的労働組織の確立に対して積極的な推進作  
用をはたしているが、同時にそれは、社会主義的生産関係と  
互に照応するものである。しかし、ブルジョア意識形態の存  
在、国家機構における若干の官僚主義的作風の存在、国家制  
度のいくつかの環における欠陥の存在が、社会主義の経済基  
礎と互いに矛盾しあっている。<sup>(33)</sup> それ故、これらの矛盾は、具  
体的な状況に基いて解決していかなければならない。矛盾は  
たえず発生し、またたえず解決される。これが、事物の発展  
の弁証法的法則である。<sup>(34)</sup>

(1) 毛沢東・「人民内部の矛盾を正しく処理する問題について」人  
民日報一九五七年六月一九日付。北京・外文出版社版・「人民内部

の矛盾を正しく処理する問題について」二二頁。

(2) 同右、二三頁―二四頁。

(3) 同右、二六頁。

(4) 同右、二頁。

(5) 同右、三頁(一行目―二行目)。

(6) 同右、三頁(二行目以下)参照。

(7) 同右、五頁―六頁参照。

(8) 同右、六頁参照。

(9) 同右、七頁―八頁参照。

(10) 同右、一五頁終りから三行目以下。

(11) 同右、一四頁二行目。

(12) 中華人民共和國中央政府組織法(一九四九年九月公布)第  
一条。中華人民共和國憲法(一九五四年九月公布)第一条。

(13) 毛沢東・「人民内部の矛盾を正しく処理する問題について」(北  
京・外文出版社)七頁―八頁。この記述は、中国の刑法の本質と限  
界を示している。

(14) 同右、八頁。ここにいわゆる国防の本質が示されている。

(15) 同右、八頁。社会主義国に建設することは全人民が行なうので  
あって、専政(独裁)は、その全人民の平和的な労働を守ることに  
目的がなければならぬ。八頁が独裁の目的を「社会主義国にきず  
きあげることである」としているのは、訳文が不正確であると思わ  
れる。

(16) 同右、八頁。いわゆる国家主権の帰属者を示している。

(17) 同右、八頁―九頁。刑罰の本質とその二元性が示されている。

(18) 中華人民共和國憲法八七条、八八条。

(19) 同右憲法二条。

(20) 同右憲法一七条。

(21) 同右憲法一八条。

(22) 中国の行政府の根本原則を示している。

(23) 毛沢東・「人民内部の矛盾を正しく処理する問題について」一〇頁。

(24) 同右、一頁参照。

(25) 同右、一二頁。

(26)(27)(28) 同右、一四頁。ここに、中国における行政法の淵源、

警察行政法のあり方の原則が示されている。

(29) 同右、一五頁。

(30) 同右、一五頁。

(31) 同右、一九頁。

(32) 同右、一九頁―二〇頁。

(33) 同右、二七頁―二八頁。

(34) 同右、二九頁。

(二) 反革命分子肅清の問題<sup>(1)</sup> 反革命分子を肅清する問題

は、敵味方の矛盾の闘争の問題である。解放後、一群の反革命分子を肅清したし、一部の反革命分子は死刑に処したが、これは広範な大衆の要求であり、大衆を解放し、生産力を解放するために必要なことであった。しかし、一九五六年いらい、状況は根本的に変化した。全国的にいえば反革命分子の

主要なものは肅清され、根本的任務は、生産力の解放から新しい生産関係の下での生産力の保護・発展へと変った。そこで、今日の政策を利用して、過去の判決をくつがえそうとし、あるいは過去の反革命分子肅清工作の大成果を否定しようとする者があるが、このようなことは、過去の政策が過去の状況に合致していたことを理解しないものであって、人民大衆の立場からは許し得ないことである。反革命分子肅清工作での中国の路線は、大衆による反革命分子肅清の路線であるからである。大衆路線をとつても肅清工作の中で欠陥や誤りが生ずることはいうまでもない。しかし誤りがあればすべてこれを是正する措置をとつたし、またとつていく。誤つた決定は破棄することを言明するを要する。あやまりを発見したら必ず是正しなければならぬ。公安部門、検察部門、司法部門、刑務所、労働改造の管理機関は、すべてこうした態度をとるを要する。反革命分子は肅清されても、新しい反革命分子が現われる可能性はなくなっていない。しかし、これを以て全国に反革命分子が多くいるという見方をして、予防警戒活動をするならば、そのために混乱を惹起することになる。

(1) 毛沢東・「人民内部の矛盾を正しく処理する問題について」、人民日報一九五七・六・一九付。外文出版社版・同名書三一頁―三八

頁。

(三) 言論や行動の是非の判断基準 「人民内部の矛盾を正しく処理する問題について」の第八の題目「百花斉放、百家争鳴、長期共存、相互監督について」<sup>(1)</sup>の中で、人民の政治生活において、言論や行動の是非をどのように判断すべきか、その基準が示されている。それは、次のようである。(1) 全国の各民族人民の団結に有利であって、人民を分裂させるものでないこと。(2) 社会主義的改造と社会主義建設に不利ではなくて、それに有利であること。(3) 人民民主專政(独裁)の強化に有利であって、この專政を破壊したり弱めたりするものでないこと。(4) 民主集中制の強化に有利であって、この制度を破壊したり弱めたりすることでないこと。(5) 共産党の指導強化に有利なものであって、この指導から離れたり、あるいはそれを弱めるものでないこと。(6) 社会主義に基づく国際的団結と全世界の平和愛好人民の国際的団結に有利であって、これらの団結をそこなうものでないこと。この六項目の基準のうち、最も重要なものは、社会主義の道の党の指導の二項目である。右の六カ条の基準は、政治的基準であるが、どの科学、芸術活動にも適用できるものである。しかし、右の観点は、いづれも中国の具体的歴史的条件下から出発したも

のであるから、これを他国にも適用すべきものとは考えていない。<sup>(2)</sup>

次に、第九の題目「少数の人が騒ぎをおこす問題について」<sup>(3)</sup>において、一九五六年に発生した一部の地方での少数の労働者、学生のストライキ事件に関連して、騒動の原因および解決方法が説かれている。それによれば、騒動の原因は二方面から指摘できる。その一つは、指導上の官僚主義であり、その二は、労働者、学生に対する思想・政治教育の不足である。<sup>(4)</sup>官僚主義の誤りの責任は、上級機関もこれを負うべきものである。<sup>(5)</sup>人民内部の矛盾の解決は、「団結—批判—団結」の方法によるべきで、騒動を起すことは正しくない。<sup>(6)</sup>

騒動の原因を根本的になくするために注意すべき点は、次のようである。(1) 官僚主義を断固として克服し、政治・思想教育を正しく強化し、各種の矛盾を適切に処理するを要する。(2) 騒動が発生した場合には、騒動を引起した大衆を正しい道に導き、この騒動を利用して工作を改善し、幹部と大衆を教育する一つの特殊な手段として、日頃解決していない問題を解決するようにするを要する。騒動の首謀者については、刑法違反分子や反革命分子を法律によって処分する外は、軽々しく処分してはならない。<sup>(7)</sup>

中国の社会にも、公共の利益を無視し、横暴にふるまい、凶行をはたらき法を犯すものも少しはいる。彼らは、毛沢東の指導する党・政府の方針を悪用または歪曲し、わざと無理な要求をもち出して大衆を扇動したり、故意にデマを飛ばして社会の正常な秩序を破ることをする。このような者を放置しておくべきでなく、法律による必要な制裁を加えなければならぬ。それは広範な大衆の要求である。<sup>(8)</sup>

(1) 毛沢東・「人民内部の矛盾を正しく処理する問題について」一九五七年六月一九日付人民日報。外文出版社版同各書六一頁―七八頁。

(2) 同右、七三頁―七五頁。

(3) 同右、七八頁―八三頁。

(4)(5) 同右、七九頁。

(6) 同右、八〇頁。

(7) 同右、八一頁。

(8) 同右、八二頁―八三頁。

### 五 三 風 整 頓

一九二九年二月に、毛沢東は、「党内のあやまった思想の是正について」<sup>(1)</sup>という決議文を党の第九回代表大会のために書いた。これにおいて、党内のあやまった思想として、「軍事一点ばりの観点」、「極端な民主化」、「非組織的な観点」、「絶

対的均等主義」、「主観主義」、「個人主義」、「流賊的思想」、「盲動主義」を指摘して、その是正方法を示し、その実践を求めた。この路線は、基本的な路線として、今日も支持されている。

三風整頓もまたこの路線に従った運動である。党内に広く存在した「主観主義的傾向」、「セクト主義的傾向」、この二つの傾向の表現形態である「党八股」というマルクス・レーニン主義の假面をかぶった小ブルジョア的思想作風を、マルクス・レーニン主義の思想原則にしたがった思想作風に整える運動がこれである。この三風整頓の運動を指導したのが、毛沢東が一九四一年五月に延安の幹部会議で行った報告「われわれの学習を改革しよう」<sup>(2)</sup>、一九四二年二月一日中国共産党中央党学校の始業式で行った演説「党の作風を整えよう」<sup>(3)</sup>、および一九四二年二月八日延安の幹部大会で行った講演「党八股に反対しよう」<sup>(4)</sup>である。これらの文章の中の主張は、すべて中国共産党員のあやまった思想態度の是正を求めるものであって、直接に中国法制の基本原則を示すものではないと思われるが、指導的地位にある者の行動についての消極的実践原則を示したものとしてみれば、やはり一種の法の基本原則であるというべきであろう。

「われわれの学習を改革しよう」は、中国共産党員の学習方法と学習制度をマルクス・レーニン主義の思想原則に従って改革することを、主張したものである。「マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンは、主観的な願望からでなく、客観的な真実の状況から出発して状況をまじめに研究せよ、と教えているが、多くの同志は、真接にこの真理にそむいている」<sup>(5)</sup>。また、党内には、「現状の研究を重視せず、歴史の研究を重視せず、マルクス・レーニン主義の運用を重視しない」<sup>(6)</sup>。非常に悪い作風がある。具体的な状況について、系統的で綿密な調査と研究をしようとせず、不確実な知識に基いて命令を出す主観主義の作風が中国共産党員の間<sup>(7)</sup>に存在していると思われる。このように毛沢東は述べ、さらに次のようにいう。

主観主義というのは、周囲の環境を系統的に綿密に研究せず、ただ主観的な熱情だけにたより、自分の感じを政策とし、客観的な実際の事物の存在を無視する態度である<sup>(8)</sup>。このような人々は、派手に立ちまわって人気を得ようとする気持はあっても、事実<sup>(9)</sup>に基いて法則性を求める考えはない。また、「華而不実、脆而不堅」<sup>(10)</sup>（見ばえだけで中味がなく、もろくて堅さがない）であり、ひとりよがり<sup>(11)</sup>で、自分こそ天下第一である

とし、「勅使」然としていたるところを飛びまわる。このような作風は、反マルクス・レーニン主義的な主観主義の方法であり、共産党、労働者階級、人民および民族の大敵である。こうした連中の姿をえがいた対句があるが、それは次のようである。

牆上芦葦、頭重脚輕根底淺

山間竹荷、嘴尖皮厚腹中空<sup>(9)</sup>。

（土塀の上の芦は、頭が重く根が浅い、山間の竹の子は、口がとがり皮厚く腹はからっぽ）

ところが、マルクス・レーニン主義の態度の下では、その理論と方法を運用して、歴史との関連において、周囲の環境を系統的に綿密に調査、研究する。歴史的研究が重要であり、マルクス・レーニン主義の理論を中国革命の実際運動と結合させなければならない。そこから中国革命の理論問題や戦略問題を解決するための立場、観点、方法をさがし出すのである<sup>(10)</sup>。主観的な想像、一時的な熱情、死んだ書物にたよってはならない。客観的に存在する事実<sup>(11)</sup>にたよって、詳細な資料を掌握し、マルクス・レーニン主義の一般的原理の指導の下に、これらの資料の中から正しい結論を引き出さねばならない<sup>(11)</sup>。事実<sup>(11)</sup>に基いて法則性を求めることが理論と実際の統一したマ

ルクス・レーニン主義の作風である。<sup>(12)</sup> 調査しなければ発言権はない。<sup>(13)</sup>

「われわれの学習を改革しよう」は、党風刷新のために書かれたものではあるが、我々は、これから中国の法運用と法解釈の原理をひき出すことができるであろう。また、立法の根本態度もここに発見することができる。

- (1) 毛沢東選集一卷八三頁―九三頁。日文版一卷一三五頁―一五二頁。
- (2) 毛沢東選集三卷七五三頁―七六一頁。日文版三卷一一頁―二八頁。
- (3) 同右、七六九頁―七八六頁。日文版三七頁―六三頁。
- (4) 同右、七八七頁―八〇三頁。日文版六五頁―八九頁。
- (5) 同右、七五五頁二行目―四行目。日文版一三頁―一四頁。
- (6) 同右、七五五頁下から七行目以下。日文版、三卷一四頁。
- (7) 同右、七五五頁下から四行目以下。日文版、三卷一五頁参照。
- (8) 同右、七五七頁、七五八頁参照。日文版三卷一七頁―一八頁参照。
- (9) 同右、七五八頁、日文版三卷一九頁。
- (10) 同右、七五九頁、日文版三卷二〇頁。
- (11) 同右、七五九頁、日文版三卷二〇頁。
- (12) 同右、七五九頁、日文版三卷二〇頁。
- (13) 同右、七六〇頁二〇行目。日文版三卷二二頁。

中華人民共和国の政治と法律の指導原理としての毛沢東思想 (飯田)

(一〇七) 一〇七

「党の作風を整えよう」(整頓党的作風)<sup>(1)</sup> は、一九四二年二月一日に中国共産党中央党学校の開学式で行った演説を整えて印刷したもので、党内における主観主義、セクト主義、党八股(事物についての分析をせず、いたづらに革命的な名詞や術語をもちこむだけで、中味がなく、空論をならべたてるものをいう)の欠陥があることを指摘し、これを排斥すべき所以を説いたものである。その大要は次のとおりである。

主観主義(学風)、セクト主義(党風)、党八股(文風)という三つの邪風には、その歴史的根源があり、それは全党的には支配的地位を占めてはいないが、いねに弊害をもたらしているものであるから、これを排斥する必要がある。

主観主義は、マルクス・レーニン主義に反するもので共産党とは共存できないものである。学風の問題は、指導機関、全幹部、全党員の思想方法の問題であり、活動態度の問題である。<sup>(2)</sup>

マルクス・レーニン主義の本をたくさん読んだからといって理論家であるとはいえない。マルクス・レーニン主義は、マルクス・エンゲルス・レーニン・スターリンが実際に基いて創造した理論であり、彼らが歴史の実際と革命の実際の中から引き出した全般的結論であって、中国の革命の中で発生

した実際問題を解明したものではない。それは、マルクス・レーニン主義の立場、観点、方法を教えるものであるにとどまるからである。マルクス・レーニン主義の実質を真に会得し、これらを応用して中国の実際問題を深く科学的に分析し、その発展法則をさがし出せるようにする人こそが、真に必要なとする理論家なのである。

次に、知識人の問題についてみるに、学生たちのもっている書物の上での知識は、彼らの先人たちが生産闘争と階級闘争の経験を総括して書き上げた理論であって、彼らが自分自身で体得した知識ではない。これらの知識は、彼らにとってはまだ一面的なものであり、それは他人が証明したものにすぎない。<sup>(4)</sup>このような書物の上の知識しかもたない人を、名実ともに具った知識人に変えるには、実際問題の研究に従事させることが必要である。<sup>(5)</sup>

真の理論は、世界にただ一つしかない。それは、客観点実際から抽出され、さらに客観的实际の中で証明された理論である。<sup>(6)</sup>

党内の主観主義には、教条主義と経験主義との二種類があるが、一そう危険なのは教条主義である。教条主義は、マルクス主義の姿をよそおって、労働者、農民、天真らんまん

青年をおどかし、かれらをとりにすることもできるからである。<sup>(7)</sup> われわれがマルクス・レーニン主義を学ぶのは、見てくれをよくするためでもなければ、それが何か神秘的なものをもっているからでもなく、それはプロレタリア階級の革命事業を勝利に導く科学だからである。マルクス・エンゲルス・レーニン・スターリンは、われわれの学説は教条ではなくて行動の指針である、とくり返し説いている。<sup>(9)</sup>

党内には支配的な地位を占めるセクト主義はなくなっているが、セクト主義の残りはまだ存在している。セクト主義の残りがすの主要なものに、「独自性を主張してたてつくこと」がある。これは、全体の利益をみず、いつも自分のうけもつ局部の仕事を利益にしたがわせようとする。これは、民衆集中制を理解していない。<sup>(10)</sup>

セクト主義の残りがすは、党内関係および党外関係の両者において消滅すべきものである。<sup>(11)</sup> 大衆と緊密に結びつかなければ敵にうち勝つことはできない。大衆から離れる行為はすべてセクト主義の思想によるのである。<sup>(12)</sup> セクト主義の思想はすべて主観的なもので、革命の実際の要求に合致しない。したがってセクト主義に反対する闘争と主観主義に反対する闘争は、同時に行うべきものである。<sup>(13)</sup>

最後に、われわれが主観主義、セクト主義、党八股に反対するにあたって注意すべきことに、「前のあやまりを後のいましめとする」(懲前毖后)と、「病をなおして人を救う」(治病救人)との二つのたてまえがある。この態度をとることこそが正しい効果的な方法である。<sup>(14)</sup>

(1) 毛沢東選集(北京・人民出版社)三卷七六九頁―七八五頁。日文版三卷三七頁―六三頁。

(2) 同右、七七一頁。日文版三卷三九頁―四〇頁。

(3) 同右、七七二頁参照。日文版三卷四一頁―四二頁参照。

(4) 同右、七七四頁。日文版三卷四四頁。

(5) 同右、七七四頁下から六行目以下。日文版三卷四五頁。

(6) 同右、七七五頁下から九行目―一〇行目。日文版三卷四六頁。

(7) 同右、七七七頁四行目以下。日文版三卷四八頁―四九頁。

(8) 同右、七七八頁六行目以下。日文版三卷五〇頁。

(9) 同右、七七八頁一四行目以下。日文版三卷五〇頁。

(10) 同右、七七九頁九行目以下。日文版三卷五二頁。

(11) 同右、七八三頁一五行目以下。日文版三卷五八頁以下。

(12) 同右、七八四頁一五行目以下参照。日文版三卷五九頁参照。

(13) 同右、七八四頁下から四行目以下。日文版三卷六〇頁。

(14) 同右、七八五頁下から三行目―七八六頁。日文版三卷六一頁―六二頁。

「党八股に反対しよう」<sup>(1)</sup>は、中国共産党内に生じた形式的教

条主義的な文章を書くことを排斥することを内容とする。主観主義、セクト主義の表現形態の一つが洋八股または党八股である。<sup>(2)</sup>歴史的にみれば、党八股は、五・四運動における封建主義的な旧八股、旧教条に対する運動が、反対の側に発展させられて新八股(洋八股)、新教条となったものである。五・四運動の指導的人物は、マルクス主義の批判精神をもたず、彼らの用いた方法は、ブルジョア的方法すなわち形式主義の方法であった。そして、党内の一部の人々の間にも、マルクス主義をしっかりと把握せず、形式主義のあやまりを犯す傾向が生れた。かくして党内に主観主義、セクト主義、党八股が生ずるに至ったものである。こうした傾向は、小ブルジョア思想の反映である。

党八股は、第一に、全編が「空論、いささかも中味のないもの」<sup>(3)</sup>である。第二に、「虚勢をはり、以て人をおどす」<sup>(4)</sup>ものである。第三に、「的なくして矢をはなち、対象を見ず」<sup>(5)</sup>のものである。第四には、「言葉に味がなく瀟三(ビエサン)(やせこけて、みにくい格好をした都市ルンペン)の如し」<sup>(6)</sup>である。第五には、「甲乙丙丁と漢方薬の店をひらく」<sup>(7)</sup>である。第六には、「無責任にして、いたるところ害を及ぼす」<sup>(8)</sup>である。第七には、「全党を毒し、革命を害す」<sup>(9)</sup>るものである。第八には、



「伝わり広まって国と民とにわざわいをなす<sup>(1)</sup>」ものであることである。党八股には以上のような罪状がある。

党八股は廃止し、教条主義を徹底的になげすてなければならぬ。

- (1) 毛沢東選集三卷七八七頁―八〇三頁。日文版三卷六五頁―八九頁。
- (2) 同右、七九〇頁。日文版三卷六九頁。
- (3) 同右、七九〇頁最下行。日文版三卷七〇頁―七一頁。
- (4) 同右、七九一頁下から三行目以下。日文版三卷七一頁―七三頁。
- (5) 同右、七九三頁七行目以下。日文版三卷七三頁以下。
- (6) 同右、七九四頁―七九五頁。日文版三卷七五頁以下。
- (7) 同右、七九五頁―七九六頁。日文版三卷七七頁以下。
- (8) 同右、七九七頁。日文版三卷七九頁以下。
- (9) 同右、七九七頁。日文版三卷八〇頁以下。
- (10) 同右、七九七頁。日文版三卷八〇頁以下。

### 六老 三 篇

一九四四年九月八日、毛沢東が中国共産党中央直屬機関の開催した張思徳を追悼する集会で行った講演「人民に奉仕する」、一九三九年二月二日に、毛沢東がベチューンを追悼するために書いた「ベチューンを記念する」、および一九四五年六月一日に、毛沢東が党の第七回大会でのべた閉会の言葉

「愚公、山を移す」という三つの著作を、中国では人民から熱情と親しみを込めて「老三篇」と呼ばれている<sup>(1)</sup>。一九六六年二月三日付の解放軍報社説「老三篇は革命者の座右の書である」は、老三篇は、「プロレタリア革命にたずさわるすべての人々、人民の事業に奉仕するすべての人々の必読書であり、革命者の座右の書である<sup>(2)</sup>」と述べ、老三篇の内容を次のように総括している。「老三篇がわれわれに教えているのは、もっぱら人民を解放するために働き、あくまでも人民の利益のために働き、なんら利己的でなく、もっぱら他人につくすという精神である。また、広範な人民大衆を結集させ、決意をかため、犠牲を恐れず、あらゆる困難を克服して、勝利をたたかいとるという精神である。さらに、人民に対して責任を負い、批判を恐れず、勇敢に真理を堅持し、誤りを正すという精神である。一言でいえば、それは、われわれが誠心誠意、中国人民と世界人民に奉仕するというプロレタリア世界観、共産主義的世界観をうちたてなければならないということである<sup>(3)</sup>」と。

老三篇のうちの第一のものが「为人民服務」(人民に奉仕する)という文章である。これは、二頁足らずのもので、短いが分りやすい内容のものである。文章の始めにおいてまづ、

「われわれの共産党と共産党の指導する八路軍、新四軍は、革命の部隊である。われわれの部隊は、完全に人民を解放するための部隊であり、徹底的に人民の利益のために働く部隊である」と述べている。毛沢東は「連合政府論」において、「緊緊地和中国人民站在一起、全心全意地為中国人民服务、就是这个軍隊の唯一的宗旨」(しっかりと中国人民の側に立つて、誠心誠意、中国人民に奉仕することこそ、この軍隊の唯一の目的である)と説き、また、「全心全意地為人民服务、一刻也不脱离群众、一切從人民的利益出發、而不是從個人或小集团的利益出發、向人民負責和向党的領導機關負責的一致性、这些就是我們的利益出發」(片時も大衆から遊離せず、人民に誠心誠意奉仕すること、個人や小集団の利益から出發せず、すべて人民の利益から出發すること、人民に対する責任と党の指導機關に対する責任とが一致すること、これらがわれわれの出發点である)とも指摘しているが、「人民に奉仕する」ことこそ、中国共産党のあらゆる活動の出發点である。

次に、第二段において、「人はいずれ死ぬものだが、死の意義にはちがいがあつた」と述べ、中国の司馬遷の「人固有一死、或重于泰山、或輕于鴻毛」(人はもとより一死あれども、あるいは泰山より重く、あるいは鴻毛より軽し)を引用して、「張

思徳同志は人民の利益のために死んだのであるから、その死は泰山よりも重い」と評価する。

第三段においては、「われわれは人民に奉仕するものであるから、もし自分に欠点があれば、人から批判され指摘されることを恐れない。」と述べる。また、そのことが正しければ改めるし、提出されたことが人民のためになるなら、われわれはそのとおりにするとも述べている。「人民の利益のためには必ず栄えるであろうと説く。

第四段においては、「共通の革命の目標を実現するために、同志と団結し、人民と団結す」べきことを説く。

最後の段においては、それが炊事員であろうと兵士であろうと、いくらかでも有益な仕事をした者であれば、何人が死んでも必ずその人の追悼会を開くことを、一つの制度としていかなければならないと述べている。このような方法で、哀悼の気持をあらわし、全人民を団結させるとも説いている。

「人民に奉仕する」という思想・態度は、一九五四年九月二〇日公布の中華人民共和國憲法にうけつがれている。すなわち、同憲法一八条は、「一切の國家機關の勤務員は、人民民主

制度に忠誠を尽し、憲法と法律に服従し、人民に奉仕することと努めなければならぬ」と規定する。

(1) 老三篇(毛沢東) 付学習手びき(中華書店) 二六頁、なお、同書は、「老三篇は革命者の座右の書である」と述べている。

(2) 同右、二六頁。

(3) 同右、二七頁。

(4) 毛沢東選集三卷九〇五頁。日文版三卷二五三頁。

(5) 毛沢東選集三卷九四〇頁一行目以下。

(6) 同右、日文版三卷三〇六頁。

(7) 同右、中国文版三卷九五頁下から三行目以下一九九六頁二行目。

(8) 同右、日文版三卷三八〇頁。

(9) 同右、三卷九〇五頁。日文版三卷二五三頁。

(10) 同右、九〇五頁―九〇六頁二行目。日文版三卷二五三頁―二五四頁。

(11) 同右、九〇六頁三行目―三行目。日文版三卷二五四頁。

(12) 同右、九〇六頁。日文版三卷二五五頁。

「紀念白求恩」(ベチュンを記念する)は、カナダ共産党員の医師ノルマン・ベチュンが八路軍の傷病者の治療に奉仕中、一九三九年十一月二日河北省唐縣黄石村で逝去したのをいたみ記念するために、毛沢東が書いたもので、同年一月二一日に発表された。この文けんは、中国において共産主

義教育の重要な古典的文けんとして尊重され、革命者の一人一人が共産主義世界観を樹立するための根本的な必読書とされている。

その内容は、四段落から成っている。第一段では、次のように語られる。カナダ共産党員で五〇余歳になるベチュンという人が、中国の抗日戦争を助けるために、一九三八年春中国の延安にきて、五台山について活動していたが、不幸にして殉職した。レーニン主義によれば、世界革命を成功させるには、資本主義国のプロレタリア階級は、植民地・半植民地の人民の解放闘争を支持し、植民地、半植民地のプロレタリア階級は、資本主義国のプロレタリア階級の解放闘争を支持しなければならぬ。<sup>(2)</sup>ベチュンは、このレーニン主義の路線を実践したものである。中国共産党員もこの路線を実践し、日本、イギリス、アメリカ、ドイツ、イタリアなどのすべての資本主義国のプロレタリア階級と団結しなければならぬ。これが狭い民族主義や狭い愛国主義に反対する中国共産党の国際主義である。

第二段においては、「ベチュン同志の少しも利己的でなく、ひたすら人につくす精神は、彼の仕事に対する極度の責任感、同志と人民に対する極度の熱誠にあらわれているが、共産党

員の一人一人が彼に学ばなければならぬ」と説いている。

第三段においては、技術的な仕事を軽視する党員の傾向に警告し、「ベチューン同志は医師であり、技術については研究の上にも研究を重ねていたが、このことは非常によい教訓である」と述べている。

第四段は結びであるが、ここにおいて毛沢東は、ベチューンとは一回あつたきりであり、何度もベチューンから手紙をもらったが、多忙なため一回しか返事を出さなかったと回想し、その死を非常に悲しんでいると述べている。そして、「ベチューンの少しも私利私欲のない精神さえ持っていれば、それは、高尚な人であり、純粋な人であり、道徳的な人であり、低級な趣味からぬけ出した人であり、人民にとって有益な人である」と結んでいる。

(1) 毛沢東選集二巻六二〇頁―六二二頁。日文版二巻四五九頁―四六一頁。

(2) スターリン・「レーニン主義の基礎について」、第六「民族問題」参照。

「愚公移山」(愚公、山を移す)は、一九四五年六月一日に、毛沢東が中国共産党の第七回全国代表大会で述べた閉会の辞である。この第七回大会において、中国共産党の路線を決定

し、新党規約を採択し、中央委員会を選出したが、当時は、中国人民の頭上には、帝国主義(とくにアメリカ帝国主義)と封建主義(国民党反動派の内戦準備)という大きな二つの山がのしかかっていた。このときにあたり、全党と全国人民を、民族民主革命の勝利を達成するよう立ち上らせるために、毛沢東が行った激励の辞である。原文B4版三頁にすぎない

ものであるが、中国では、共産主義の世界観をうち樹てる上で、もっとも根本的な必読者の一つとされている。この著作の中で次のように述べている。「全党員が決意を固め犠牲を恐れず、あらゆる困難を克服して勝利を爭取するだけでは足りず、全国の広範な人民大衆に、心から進んでわれわれとともに奮闘し、勝利をたたかいとるよう自覚させなければならぬ。中国は、反動派のものではなく、中国人民のものであるという確信を、全国人民にもたせるべきである。中国には、むかし、「愚公移山」という寓話があった。その話というのは、むかし、華北に住んでいた北山の愚公という老人の物語である。老人の家の南側には、太行山(タイハンシャン)と王屋山(ワンウーシャン)という二つの大きな山があつて、家に入りする道をふさいでいた。愚公は、息子たちを引きつれ、鍬(くわ)でこの二つの大きな山を掘りくずそうと決意した。

智叟という老人がこれをみてふきだし、お前さんたち、そんなことをするのは、あまりにも馬鹿げているじゃないか、お前さんたち親子数人で、こんな大きな山を二つも掘りくずしてしまふなんてとでもできやあしないよ、といった。愚公は答えた。わたしが死んでも息子がいるし、息子が死んでも孫がいる、子々孫々と絶えることがないのだ。この二つの山は高いけれども、これ以上高くなりはいしない。掘れば掘るだけ減るのだから、どうして掘りくずせないことがあるうかと。

愚公は智叟のあやまった考えを反ばくし、すこしも動揺しないで、毎日、山を掘りつづけた。これに感動した上帝は、二人の神仙を下界に派遣して、二つの山を背負い去らせた。現在、中国人民の頭上にも、やはり帝国主義と封建主義という二つの大きな山がのしかかっている。中国共産党は、はやくから、この二つの山を掘りくずしてしまおうと決意している。われわれは、必ずやりぬき、たえまなく働きつづける。そうすれば、われわれも上帝を感動させるであろう。この上帝とは、外ならぬ全中国の人民大衆である。」

「われわれは、アメリカ政府の援蔭反共政策に反対する。しかし、われわれは、第一に、アメリカ人民と彼らの政府とを区別し、第二に、アメリカ政府内の政策決定者と下部の一般

職員とを区別するものである。」<sup>(2)</sup> この言葉は、中国共産党が明確に階級的立場から政府と人民を区別し、帝国主義の政策決定者は敵であるが、その下にある一般公務員をただそれだけの理由では敵視するものでないことを宣明したものであった。<sup>(3)</sup> 中国共産党の指導する政府の対外政策の基本線を示すものである。

(1) 毛沢東選集(北京・人民出版社)三卷一〇一頁―一〇三頁。日文版(北京・外文出版社版)三卷三九一頁―三九四頁。「愚公移山」という故事は「列子」の「湯問」篇にある物語である。

(2) 同右、三卷一〇二頁下から七行目―下から四行目。

(3) 毛沢東・中国革命戦争の戦略問題・毛沢東選集第一卷一七一頁(日文版・二七四頁)……「レーニン」は、マルクス主義のもっとも本質的なものとマルクス主義の生きた魂は、具体的状況を具体的に分析することにあるといっている。右のレーニンの言葉は、右の選集の注(二二三頁)によれば、列寧全集第二五卷(日文版レーニン全集第三二卷)の「共産主義」という論文にある。

## 七 経験の総括から法則を求め

この研究ノートの総しめくりとして、次に、一九六九年三月、北京周報に掲げられた「毛主席の最新指示」を引用しよう。

毛主席最新指示<sup>(1)</sup>

「真剣に経験を総括しなければならない。

ひとつの部門へいって状況を了解するさいには、運動の全過程——はじめはどうだったのか、あとでどうなったのか、いまはどうなったのか、大衆はどのようにやったのか、指導側はどのようにやったのか、どんな矛盾や闘争がおこったのか、これらの矛盾にはあとでどんな変化がおきたのか、人びとの認識にはどんな発展があったのか——を了解して、そのなから法則的なものをさがしだすようにしなければならぬ。」

この毛主席最新指示は、中国における政治と法発見の基本的態度を指示しているが、われわれは、これから、法律学・政治学の基本的方法論を教えられる。

(1) 北京周报第七卷二二号(通卷二九三号)(一九六九年三月二五  
日号)二頁。